

特集 「移動」に寄せて

井 谷 鋼 造

イスラーム世界を代表する歴史哲学者、社会思想家であるイブン・ハルドゥーン（一二三三—一四〇六）は、邦題『歴史序説』として知られる、イスラーム世界、西アジア・北アフリカ地域だけでなく、普遍的な人類社会、国家をその典型とする人間組織の政治、経済、文化・学術、社会現象を広範囲、かつ根源的、体系的に考察・究明し、「アサビーヤ」（連帯意識）に基づく人間の協業（タアウーン）が都市文明（ウムラーン・ハダリー）を生み出し、発展させていくという観点から、国家や王朝（ダウラ）の生成・発展・衰亡の過程を具体的、理論的に叙述した書物の著者として、欧米の学界においてもその名を知られた大学者である。われわれは、幸いにして、長らく京都大学文学部・西南アジア史学研究室で主としてこの著作などをもとに、アラブ・イスラーム史の研究と教育に当たってこられた森本公誠博士（現東大寺長老、東大寺総合文化センター総長）による精確無比、流麗にして達意の日本語訳（イスラーム古典叢書、全三巻、岩波書店、一九七九—一九八七年・岩波文庫版、全四冊、二〇〇一年）のお蔭で容易にその内容に接することが出来るが、その内容たるや、ひとりイスラーム世界や西アジア・北アフリカ地域の研究者のみならず、凡そ洋の東西を問わず、歴史的に人類社会の過去・現況・未来に関心を抱く者ならば、『歴史序説』という一見控え目な邦題にもかかわらず、驚嘆と共感を以て読み終えずにはいられない、圧倒的に上質で豊富な量の学術知と経験知、論理的な思考と体系的な思索に裏付けられた、人類学術史上の金字塔といふべき一大業績である。

さて、このイブン・ハルドゥーンが一二三七年に、現在のアルジェリア内陸部にあるイブン・サラマ城で『歴史序説』の草稿を完成させるに至るまでの状況、及びその後も数奇な運命に翻弄されながら、生地である故郷のチュニス（ト

ウーニス）からエジプトに渡り、カイロでその死を迎えるまでの活躍ぶりについても森本博士による好著『イブン・ハルドゥーン』（人類の知的遺産二一、講談社、一九八〇年・講談社学術文庫版 二〇一一年）があり、歴史的な背景を丁寧に解説したこの著作によって、その生涯を具に辿ることができる。この書物によれば、イブン・ハルドゥーン自身『自伝―西また東』という題名の、死の前年に至る詳しい記録を残しており、この証言を基にしながら森本博士は、恐らく本人が書くことを憚ったり、率直に真実を語ることが出来なかったであろう数々の歴史的な事件当事者としてのイブン・ハルドゥーンの立場を勘案して説明を加えられており、その結果としてわれわれは、その生涯の詳細な軌跡を知ることができるのである。その内容は、これまた驚くべきもので、イブン・ハルドゥーンの生涯は、旅に次ぐ旅、移動に次ぐ移動に満ちており、彼が人類文化史上に燦然と輝くといつて決して過言でない大著『歴史序説』を完成しえた背景や環境には、森本博士が「波瀾万丈」と形容されている、時には自身が苦悶と絶望に打ちひしがれ、辛酸を嘗める（二四歳の時、一年九箇月にも及ぶ投獄生活を経験した）ような人生経験があつたのである。ここにそれらを逐一書き記す余裕はないが、イブン・ハルドゥーンは北アフリカ地域にある現在のチュニジア、アルジェリア、モロッコの三国を主舞台に、当時西方イスラーム世界の主要な政治勢力であつた、ハフス朝、ザイヤーン朝、マリーン朝各々の消長と共に、また各王朝内部の権力抗争、クーデタ、確執、陰謀等の結果として、期待と失望、憧憬と落胆を交々胸中に抱きつつ、招聘と亡命、なかば強制的な連行と追放、といった形での、総計すれば相当に遠距離となる空間的な移動を余儀なくされた。当時キリスト教徒側からの攻勢に曝されながら、イベリア半島に孤塁を守っていたグラナダのナスル朝の許へも亡命や使節の形で来訪、滞在した経験があり、一三六四年にはナスル朝の外交使節として、かつて先祖のハルドゥーン家が支配していたセビーリヤにカステーリーリヤ王ペドロ一世（残酷王）の許を訪れている。『歴史序説』の完成後も最終的に故郷チュニスを捨てるような形で巡礼を口実に一三八二年エジプトに逃れ、当時のブルジー・マムルーク朝下のカイロでマリーク派の大法官職に何度か任命されるものの、王朝内外で多難多事の時代に度々その政治的な変動に巻き込まれ、一四〇一年には西アジア遠征（七年

戦役）中の、中央アジアが生んだ稀代の大征服者ティムールとシリアの中心都市ダマスカス郊外で会見するなど、もしイスラーム世界史を舞台とした「大河ドラマ」が作られるとしたら、（当面千パーセント以上の確率で実現することはあり得ないだろうが）主人公としてこの人を抜きにしては考えられない位幾多の劇的なエピソードに彩られ、浮沈に満ちた激動の生涯を送ったのである。

以上のようなイスラーム世界史上のみならず、人類文化史上に傑出した大業績を残すことになったイブン・ハルドゥーンの生涯の大きな部分を空間的な移動（当人にとってはその多くが自ら希望したものではなかったとはいえ）が占めていたという事実は、この度お手許に届いた、「移動」を共通テーマとする、本特集号巻頭の一文を草するに当たり、筆者が是非とも書いておかねばならないと思った事柄である。イブン・ハルドゥーンの業績は、残念ながらイスラーム世界の枠を大きく超えて人類文化史上の意義を広く認識されている訳ではないように思われるが、西洋古代史上その名と著作を知らぬ者はいないであろう、ヘロドトスの著作『歴史』が著者自身の当時広範囲に及ぶ旅行（＝空間的な移動）の経験に基づいて書かれているとされる事実からも、良質の歴史資料そのものとそれらについての名高い優れた古今東西の諸著作に現れる思想や記述内容と著者自身の移動経験は、ほとんど不可分の関係であることが見て取れるのである。

二〇一三年四月二〇日に開催された八回目となる史学研究会例会では、「移動」を共通テーマとして、西洋史、西南アジア史、日本史、二十世紀学、地理学という五つの専修から推薦された発表者に口頭発表をしていただいた。発表者の方々には、その後口頭発表の内容を中心に、本誌に掲載された論説を執筆していただき、共通テーマで原稿のみを依頼した東洋史、考古学、現代史の各専修推薦の執筆者からもご寄稿をいただき、この特集号を編集、発行することとなった。いずれも力作をお寄せ下さった執筆者各位に衷心より謝意を表したい。

冒頭で取り上げたイブン・ハルドゥーンのような例は、むしろ例外、特殊の部類に属するのであるが、空間的・時間的に様々なレヴェル、隔たりを越えて人類は過去に移動を繰り返してきたし、また現在も絶えず移動を行なっている。空

間的な移動が行なわれる原因や理由も様々であり、本特集号掲載論説で主要テーマとして扱われた内容を大きく分類してみると、①戦争や軍事行動に伴う移動、②巡礼、移民、植民地での教育活動を目的とした移動、③人間が作りだし、廃棄したモノの移動などに大別できそうであるが、その他まだまだ多くの移動の例を挙げることが出来、凡そ人類が関わるありとあらゆる活動について移動という特性を想定することが可能であろう。この分類に従って、本特集号掲載論説の内容を筆者なりに簡単に紹介しておきたい。

①の戦争や対外的な軍事活動に関連する移動が巻き起こした国内的な論争、他国による大規模な軍事侵攻とそれに対抗するアイデンティティの危機を論じた著作の内容を詳しく紹介・分析したものに津田論説「第一次・第二次世界大戦期のカナダにおける徴兵制論争」と村尾論説「咸豊初年に『夷氛聞記』と『海国四説』を読む」がある。前者においては、元来がヨーロッパからの移民国家であったカナダが第一次、第二次世界大戦への参戦という大規模な兵力移動に伴って、国内で展開された徴兵制論争を中心テーマに、特にケベック州のフランス語圏住民の対応が一九一七年の総選挙や一九四二年の国民投票の経過や結果の分析から考察される。後者では一八四〇―四二年のアヘン戦争後、広州地域社会の有力な指導者であった梁廷枏の著作で、咸豊初年（一八五二）に刊行された『夷氛聞記』と『海国四説』の内容紹介と分析を中心に、アヘン戦争からアロー号戦争（一八五六―六〇年）に至る期間に清朝体制下、知識人の危機意識の具体相が明らかにされている。

②の巡礼、移民、植民地での教育活動を目的とした移動について扱っているのは、櫻井論説「無料で運ぶわけではないし、神の愛のために運ぶわけでもない」、坂口論説「日本におけるブラジル国策移民事業の特質」、朴論説「植民地朝鮮に渡ったコロニアル・ミッシヨナリー」の三本である。

櫻井論説では、一四―一六世紀ヨーロッパからの聖地イエルサレムを中心とした巡礼者を運んだヴェネツィア・ガレー船のパトロンたちの実態が巡礼記史料の網羅的で綿密な分析を基に、生き生きと描かれている。論説のタイトルにも

なっている表現は、フランチェスコ・スリアーノ（一四八四年）の言であるというが、同じく論説中、以下のようなニコラ・ルーヴァンの言葉の引用は、当時の巡礼客運搬を生業とするガレー船パトロンたちの実態を痛烈な批判をこめて何よりも生々しく活写しており、興味深い。「この獣（パトロン）が出費を惜しんでいるのは見え見えである。ヴェネツィア人は何かを得ようとする時には馬鹿丁寧になり、しかし一度手に入れると後は知らんぷりをするのである。」

坂口論説は、一九二〇年代から一九四〇年にかけて当時の日本政府が国策事業として行なったブラジルへの移住民送出的実態や移民事業への参加動機などについて、移民送出を一手に担った海外興業株式会社の「伯刺西爾行移民名簿」の悉皆調査を基に、数値やその多寡、偏差に現れる地域別に特殊な要因や背景を、熊本県や北海道を例に取り上げながら、具体的に明らかにしている。

朴論説は、併合以前から第二次大戦期にかけて当時の日本の「植民地」状態になっていた朝鮮半島における女子教育に深く関与した日本人女性教員の実態を明らかにしながら、彼女らの教育に対する高い使命感や現地の「遅れた」民衆に対する教育観が、「西洋宣教師とミッションスクールが日本近代化に果たした役割を大いに評価する見方から来た着想」に基づくものであったことを実証している。

③の人間が作り出し、廃棄したモノの移動を扱ったものに、渡辺論説「自区域内処理原則とごみの移動」及び次山論説「古墳出現期の社会と土器の移動」がある。前者は、現代日本における、地方自治体のごみ処理とそれに伴うごみ移動の問題をガヴァナンスや法的な視点から取り上げたものであり、日本のみならず全世界的に、また将来にわたっても多大の関心とコストが払われ、特定の自治体や地域に廃棄物処理の負担が集中しないような、合理的で妥当な解決法が探られなければならないテーマを具体的に扱っている。この論説が取り挙げている、人間が産業活動を含む日常生活で排出した通常の廃棄物の処理や移動についてさえ、様々な角度からの議論やリサイクル、リユースなどの試行、住民や自治体間での利害調整が長い時間をかけて行なわれてきたのであるが、現代日本が当面しているごみの処理や移動の問題をさらに敷衍

していけば、二〇一一年三月の東日本大震災以来特に国家的な課題として大きく取り上げられることになった、日本全体で各地の原子力発電所から出た核廃棄物について、その最終的な処分やそれに伴う移動について喫緊の、また長期的な将来にわたる問題に思いを致さずにはいられないのは、ひとり筆者のみであろうか。

次山論説は、弥生時代から古墳時代への移行期に特徴的に認められる土器の移動現象を、先行研究を丁寧で紹介しながら考察したものであり、日本における文字資料出現以前の土器というモノの移動が考古学的に解明されている。

以上、筆者なりの読み方、解釈の仕方では本特集号所載論説の簡単な内容紹介をさせていただいたが、願わくば読者諸賢がこの特集号をじっくりお読みいただいて、それぞれの立場から歴史上の、そして現代の人間やモノ、情報の移動という広範にして、様々な角度からのさらなる検討が可能になるテーマを想起していただくようすがともなれば、史学研究会の例会及び本特集号で移動を取り上げた大きな意義があったと信じるものである。